

---

# MOON-1 『もう一つのおとぎ話』

みづき海斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MOON - 1 『もう一つのおとぎ話』

### 【Nコード】

N9413L

### 【作者名】

みづき海斗

### 【あらすじ】

かつて。

この新宿には二人の『帝王』がいた。

『闇』の一族を統べる吸血鬼一族の、その長である彼らは、『光』と『闇』とを統べる『唯一無二』の『帝王』の座をめくり闘つた……この新宿で。

そして……一人は永久とも思える深い眠りにつき……一人はこの現世へ留まった。

陽の光を、『昼の住人』へと明け渡し、『夜』の闇を駆け抜ける

-  
-  
-。

決して越えてはならない、『光』と『闇』の境界線を越えようと  
する者たちを、『帝王』の名にかけてその手で葬るために。

## もう一つのおとぎ話（前書き）

現代版吸血鬼ファンタジー小説です。気分転換したい方にお勧めです。

## もう一つのおとぎ話

MOON - 1 『もう一つの

おとぎ話』

### 序章

散華。

満開の、狂った様に舞い散る桜の樹の下で、黒いコートに身を包んだ美貌の

青年が振り返るのを、少女は悲痛な声で咎めた。

「やめて！彼を殺さないで！」

視界を覆う程の薄紅の花弁が、その声を遮る……。

青年は振り返り、走り寄る若者の胸元に向けて、静かに右手を振り上げた。

一条の煌きが、花弁の嵐の中を駆け抜ける……

瞬間、彼の瞳には哀しみの色が宿った。

閃光の果て、若者は……口元に二本の鋭い牙を宿した青年は、苦痛とも哀しみ

ともとれる表情をうつすらと浮かべて、音もなく地面にひれ伏した。歩み寄る、自分と同じ牙を持つ翡翠色の瞳の青年を静かに見上げる。

「帝王……」

自分たちの『主』の姿を、感嘆を込めた眼差しと共に……。

「春樹っ！」

『帝王』と呼ばれた青年の白い指先が彼の体に触れるよりも早く、少女は

横たわる若者のもとに走り寄り、その体を強く抱きしめた。

「許さないからっ、あなた！」

きつ・・・と、溢れる光を宿した両眼で、彼の顔を睨み付けて、少女は

叫んだ。「殺してやるっ！あなたの心臓にも」

と、両腕かいなに抱いた若者の胸元に突き刺さる一本の『ヴァンパイア香水』に視線を移し、「この杭を打ち込んでやる・・・吸血鬼っ！」

「！・・・」

少女を見つめる青年の瞳に、僅かな陰が宿る。

「ごめんね・・・」

青年は、呟いた。  
散舞。

若者の紅を宿した花卉が、一層狂おしく舞い散る。

少女と、二人の青年の姿をその両腕に包み込む・・・全てを『闇』に押し隠す様に。

彼方には、不夜城の新宿を彩る鮮やかなネオンライト・・・その片隅で。

tagge - 1

MOON - 1 『もう一つのおとぎ話』 S

かつて。

この新宿には二人の『帝王』がいた。

『闇』の一族を統べる吸血鬼一族の、その長である彼らは、『光』と『闇』とを統べる『唯一無二』の『帝王』の座をめぐり闘った・・・この新宿まほろで。

そして・・・一人は永久とも思える深い眠りにつき・・・一人は

この現世へ留まった。

陽の光を、『昼の住人』へと明け渡し、『夜』の闇を駆け抜ける  
……。決して越えてはならない、『光』と『闇』の境界線を越えようとする者たちを、『帝王』の名にかけてその手で葬るために。

「あつ！『Office Too One』のプロモーションビデオ！」

「え？本当？」

制服姿の女子高生が、新宿ALTA前の巨大なスクリーンを見上げて歓声を上げた。

土曜日の若者で賑わう東口の広場で、彼らの視線は少女たち声を合図にそのスクリーン釘付けとなる。

初夏の訪れを思わせる鮮やかな緑の樹木の下で……有名デザイナーの白いスーツを見事に着こなした青年が、ゆっくりと振り返る。寄り添う女性の感嘆に揺らめく熱い眼差しを、彼の翡翠色を帯びた瞳が、優しい微笑と共に受け止める。

喧騒に支配されたこの街の『時』さえ、刹那の間に止める事が出来る、その微笑。

「本当……彼って理想の恋人よね。」

ブランド名の、青いゴシック体のテロップが左右に流れるのを見つめながら、

女子高生の一人が呟いた。

「あたし、彼のデビュー当時の『MONA』のポスター持ってるんだから。」

と、傍らの少女が白いバックを片手に自慢げ言う。

「やだ！こいつ、かくしてたな。」

キヤーと悲鳴を上げて駆け回るセーラー服姿の少女たちを後目に、彼女はじつとスクリーンを見つめていた。

「知美？」

無言の彼女に気付いた少女の一人が、小首を傾げて彼女に声をかける。

「どうしたの？・・・まさか、あなたも彼の追っかけしてたとか？」

「えー！本当？」

『MONA』のポスターを持っている、と言った少女が驚いた様に彼女を見つめた。

「あー、隠してたな！」

冗談半分に彼女の鼻先で人差し指をくるくると回しながら詰め寄る。

「白状しなさい、知美。」

「・・・そんなんじゃないわ。」

歩道と車道とを遮る、薄汚れたガードレールに腰を委ね、今は別のプロモートフィルムが走るスクリーンを見上げたまま、知美は答えた。

「私、彼の事嫌いだもん・・・殺したいくらいに。」

「え・・・」

円を描く少女の指先が、中空で停止する。

青に変わった信号を合図に・・・新たな人の波が東口からALTA前に押し寄せて来る。

知美は、『彼』の残像を求めるかのように、じっとスクリーンを見つめていた。

「だって・・・あの人を殺したんだもん。」

新宿、御苑を眼下に望む大京町のマンションの一室で……

「暑いっ！暑すぎるっつ！まだ五月だぜ！」

秀はリビングの片隅で団扇がわりの雑誌をぱたぱたと揺らしながら、恨みを込めた口調で呟いた。「このまま夏になったら、どうすんの？灼熱地獄よ、まったくくう……」

「いい若者が朝っぱらから、ゴロゴロしない！」

黒い掃除機をかついだ朝子は、明るい色の長い髪を舞い込むそよ風に腰の辺りで揺らしながら、つかつかと彼のもとへ歩み寄ると、

「掃除の邪魔！一緒に吸い込んでじゃうぞ。」

と、脅し文句と共についんついんと唸るタービンノズルを彼の鼻先へ近づけた。

「げっ！やめろ、朝子！」

秀は吸いかけのセブン・スターが置かれた灰皿を片手に慌てて身を捻ると、上目使いに彼女の顔を見上げた。

「お前なあ、もそつと穏やかに『退去』の旨を告げるよな。」

「あなた相手は、実力行使が一番。」

朝子は形のの良い唇に天使の微笑みを浮かべて言った。「和人だつたら言わなくても、自主的にどいてくれるわ。」

「差別だーっ！」

彼女の掃除機攻撃を避けながら、秀は悲鳴を上げた。

「おはよう、朝子さん、秀……」

南側の部屋から広いリビングに姿を現した高校の制服姿の祐希は、<sup>フローリング</sup>足下を転がり回る秀の姿を茫然と見つめ、

「何やってるの、秀さん。歩腹前進の練習？」

「自衛隊の駐屯基地じゃないぞ、ここわ！」

秀は祐希の後ろにそのまま回りこんで答えた。「朝子にいじめられた……」

「強いね、朝子さん。」

感嘆の表情で祐希が呟くと、朝子はVサインでにっこりと微笑ん

だ。

「楽勝楽勝！あ、祐希くん、もう出かける時間だっけ？」

「そう、寝坊しちゃって」

と祐希は、はた！と現実に戻り、学生鞆を胸元で抱きしめた。

茶色い彼の髪に朝日が戯れている……。

「ごめん、朝子さん！朝食抜き！」

申し訳なさそうな顔で祐希はそう言うと、慌てて玄関へと駆け出した。

「ならば、その朝食はこの秀さんが。」

と、朝子に止める隙も与えず、秀がその後を追う。

「まったく、秀は！」

「でも、珍しいね。秀さん。」

朝子の呆れ返った台詞をはるか後方で聞きながら、祐希はフレンチトーストを貪る傍らの秀に向かって声をかけた。「この時間、秀さんがマンションにいるなんて。」

「G・Wゴールデン・ウィークぶっ潰しての『CASA』の夏服撮影だぜ。

こちらで」

秀は、祐希の為に朝子が入れたミルク入りのキリマンでトーストを一気に流し込むと、

「一息入れなきゃ、来月からの秋服撮影スケジュールこなしきれませんって。」

「わ、秀さんにもインターバルってあるんだ。」

祐希はくすくすと笑いながら、銀色のドアノブに手をかけた。「

年中無休の狼男

(ウルフガイ)かと思ってたけど。」

「化け物じゃない、化け物じゃ。」

秀はぱたぱたと右手を振った。「行ってらっしゃい、勤勉は学生のモットーなり。」

「行って来ます！」

祐希は笑いながら、部屋を後にした。

いつもと変わらぬ朝の光景……。

世界各地にその拠点を持つ、大財閥篠原グループの御曹司 篠原祐希が、突然の家出の後、彼らと出会い、その『同居人』となつてからもうすぐ一年が経とうとしていた。

話 『 Stage - 3

MOON - 1 『 もう一つのおとぎ

そろそろスーツに身を包んだ人々が姿を見せ始めるであろう、この時刻――

祐希は、金色の朝日が伸び始めた路上に走り出た。

「やば、完全に遅刻！」

左手首の羅針盤をちらつと眺め、全力疾走の体制に入る。「やっぱ、DVD途中でやめれば良かった。」

昨夜、深夜三時まで秀と見たアクション映画のストーリーを思い辿りながら、裕希は新宿駅を目指して駆け出そうとした。

その時――マンションの前の電柱の陰から、じつと階上の一室を見上げるセーラー服姿の少女が目に入った。

「……」

白い、その制服は彼もよく知っている、某有名私立高校の制服。

――確か、下高井戸にある……

祐希は何気なく、彼女の視線の先を追った。

そこには、暖かい日差しの中、白いシーツを広げる朝子の姿があった。

――和人のファンの子かな……。

秀が彼の『素性』を決してマスコミに明かしてはいない事を、祐

希は百も知っていたが。

「……………」

ふと、少女は自分を見つめる祐希に気付いて振り向いた。

「あ……ごめん。」

無意識にそう謝り、祐希はにつこりと笑った。「あんまり熱心に見てるから、何かあるのかなって思ってた。」

「……『Office Too One』の」

少女は無表情で、彼を見つめて答えた。「尾崎秀久さん、ここに住んでるって聞いたから。」

「え……あ、うん。」

祐希は学生鞆を左手に持ち替えて答えた。

「そう……らしいね。」

やっぱり、という表情が浮かんでしまうのを必死に隠しながら、彼の「……『Office Too One』のファンの子？ 人気あるよね、あのプロダクション。」

その「彼ら」と同居人であるという事を、笑顔ですっとぼける。

「一流カメラマンの尾崎さんを始め、あそこのプロダクションには一流所が揃ってて、今までも話題になってたけど」

少女は、誰にともなくぼつりと喋り始めた。

「その名前を世界的に知らしめたのは、昨年、突然専属モデルとして起用した無名の新人と……その作品、『MONA』。」

「……」

「それによつて、マドモアゼルのイメージから脱しきれなかったイタリアの某有名ブランドは、日本での新たな市場を開拓し、『Office Too One』もその名前を不動のものにした。」

「詳しいね。」

祐希は肩をすくめた。

陽光が彼の体を背後から、抱きしめる。

彼女の他に誰もいない事を確かめて、祐希はそつと、

「秀……尾崎さんなら、今部屋にいるよ。今日は、オフだって。」

「……」  
少女は無言で、優しく微笑む彼の顔を見つめた。

「彼には、用はないわ。」

「そう……」

「私、知ってるから。」

「え？」

僅かに驚いた表情を浮かべた祐希から視線を離し、彼女は再び白いマンションを見上げた。

朝子の姿が消えた、そのベランダを。

「私が会いたいの『彼』……闇の中でも翡翠色の光を放つ瞳をもつ、彼の事を」

と呟いて、少女は静かに振り返った。「私は知ってる。『彼』が

『昼の住人』ではない事を。」

「!……」

少女は、彼の反応を確認すると身を引いた。

そして……朝日に照らされる路上を駆とは反対の方向へ、静かに歩いて行った。

話『 Stage - 4

MOON - 1 『もう一つのおとぎ

眼下に広がる新宿御苑の木立の緑を、早朝の澄んだ風が揺らしていく。

『……の連続殺人事件は、今月に入ってこれで三件を数え……

』  
ニユースキャスターの『事件』を告げる声が、ベランダから戻っ

た朝子の耳にふいに飛び込む。

「また・・・」

朝子は眉を顰めた。

リビングに差し込む朝の光を、白いカーテンで遮ると、朝子はカウターキッチンに座る和人に声をかけた。「最近多いわね。謎の連続殺人事件。どの死体も首筋に小さな傷跡を残すだけで、出血多量死ですって。」

「ああ。」

もう一人のこの部屋の主・・・和人は、いつものように気だるそうな表情でブラックのキリマンを飲みながら、溜息混じりに答えた。

「犯人を捕まえるのはおるか・・・探し出す事も至難の業だろう、<sup>かれら</sup>警視庁にとっては。」

スクリーンに映し出される姿そのままに・・・和人は陽光のライトの中、翡翠色の瞳でじつと中空を見つめていた。

Gパンに赤いカジュアルシャツ姿の朝子は、彼の所へ歩み寄り、「あなたも追ってるんでしょ？その『犯人』を。」

と、カーテンをすり抜けた淡い光に縁取られる、彼の横顔を覗き込んでにっこりと微笑む。「近頃すっかり、あなたが宵っ張りの朝寝坊に戻ったって祐希くんも心配してたわよ。」

まるで、夜遊びが過ぎる弟を叱る様な口調の朝子。

和人は傍らに立つ、長身の彼女の顔を少し見上げ、

「俺、もともと夜型だから・・・『朝』と名の付くものは、かなわない。」

と、悪戯気に軽く舌を出してみせる。

「殊勝な心がけね・・・心がけと早起きついでに、朝子さん特製のモーニングセットなんて召し上がる？」

「う・・・。いらない。」

『早起き』と『朝食』という文字を自分の辞書から抹殺している和人は、心底嫌そうな顔で答え、キリマンを一口、口に含んだ。

育ち盛りの祐希と食欲魔人の秀には、想像もつかない事だが・・・

朝子はくすくすと笑い、カウンターへ入った。

「今日はまた、随分と『早起き』じゃない？あなたには珍しく。」  
木製のカウンターに置かれた時計の針は、午前八時を少し廻ったところだった。

「ここへ帰ったの、朝方だったでしょ？」

犬の絵が描かれた自分のマグカップに、暖かいキリマンを注ぎながら、朝子は彼に尋ねた。

「ああ、そうだけど」

和人は心配そうな彼女の視線を受け止めて、軽く肩を竦め、「祐希にあんま余計な心配をかけたくないからな。ちよつど仕事もオフだし、昼間はボケーツとしてるよ。」

「何か、ファンの子には見られたくない光景だわね、それって。」

「何が見られたくない光景だつて？」

彼女の言葉に答えたのは、朝子との早朝の『格闘』後、西側の自室で朝寝としゃれこんでいた秀だった。

のおとぎ話』 Stage - 5

MOON - 1 『もう一つ

リビングへ姿を現した彼は、和人より三センチほど高い身長をE DWINのGパンとTシャツで包み込み、黒い長袖のシャツを着た和人の隣の席へ腰を下ろした。

「何、ダンナ。可愛い女の子と連れだつて六本木でも歩いてたのか、昨日の夜は。俺にも紹介しろよな。」

「歩いてない、歩いてない。」

矢継ぎ早にそう言う彼へ、和人は呆れた視線を移して、「お前じ

やあるまいし。」

「そうだよなー……。じゃ、何で近頃」

秀は眠気覚ましのコーヒーを朝子から受け取りながら、「帰りが遅いのかなー、

秀さんと裕希くんを放ったらかしにして。」

「秀、あなたね。」

朝子は、コーヒーの香りと『のどかな朝』を満喫している秀の顔を見つめ、

「仕事がオフ日だからって、頭の中までオフにしちゃってるの？」

と、細い指先で自分のこめかみを指し示す。「ニユースぐらい見なさいって。」

本当、呑気マイペースなんだから、この人は。」

「ニユースなんか見なくなつて、俺には『野生』のカンがあるもんね……」

警察の捜査網よりもよっぽど頼りになる……」

と、欠伸混じりに濃いめのキリマンを一口飲むと、ちらっと傍らの和人を見つめ、

「誰かさんは、『夜遊び』の仲間に入れてくれないけど。」

「拗ねるなよ、秀。」

和人は苦笑し、「お前の『夜遊び』は、満月までにしろよな。」

「和人のいじめっ子。」

『天下無敵』を自称する秀も和人には叶わず……見えない尻尾を寂しげにばたばたと振っている様子だった。

「和人も気をつけて。」

朝子は目を細めた。「こんな『事件』が頻発して起こるなんて、ただ事じゃないわ……奴らが……九桜くさくらの一族が、あなたが『事件』を追ってるって知ったら、ただじゃおかないと思う。」

「朝子のモーニング・コーヒーまでには」

和人は、不安気に呟く彼女に微笑して答えた。「帰ってくるよ、大丈夫。」

週末を翌日に控えた新宿。

都庁へと続く地下街の一角で、深夜、二つの影が都民広場へと続く階段から僅かに忍び込む月明かりに照らされて浮かび上がった。

「どうして・・・」

緑色のスーツに身を包んだ女性は、眼前の男性から一步身を引き、茫然とその姿を見つめた。

恐怖に彩られた瞳には、白銀の光を放つ二本の牙を口元に宿した若い男性の姿が映し出されている。

「どうしてって・・・君と『永久』<sup>とこしえ</sup>を生きたいのさ。」

男性は彼女の『恐怖』を気に留めた風もなく、いつもの微笑みでそう告げた。

「君だって俺の事・・・愛しているんだろう？」

「冗談じゃないわ！」

彼女は叫ぶと、激しく頭を振った。「おかしいと思った。会う時はいつも夜で

・・・夜明け前には絶対、姿を消してたんだもんっ！」

涙を浮かべた両眼で、今は『夜』の住人と化した恋人をじっと見つめる。

「あなたを確かに、愛している・・・。だけど、化け物の一員になるなんて真っ平！」

彼女は青いハンドバックを彼の胸元に投げつけて叫んだ。

「私は太陽の下で生きたいもの！」

「靖絵！」

青年は、中央通り目指して駆け出した女性の後を追った。

疾風の速さで……

「!……」

自分の頭上を飛び越え、目の前に着地したGパン姿の彼に気付き、慌てて立ち止る彼女。

「やめてよっ!」

黒いアスファルトを踏みしめる彼女の足下を、彼の背後から差し込む車のテールランプがゆつくりと流れていく。「冗談でしょ……? 吸血鬼なんて……SFの世界よ。」

「じゃあ」

彼はにつこりと微笑んで言った。「俺は『誰』?」

「……」

そつと、彼女が置き忘れたハンドバックを青年がその胸元に差し出した刹那。

彼の両手は、彼女の首を捕らえていた。

「!……」

力無く、青年の胸元に頂垂れる女性。

青白い月の光が、彼女の白い首筋を辿る。

「『時』は」

頂垂れる彼女の体を左腕に抱き、一遍の詩を口ずさむかの様に彼は、言葉を紡ぐ。「その命の儂さに報いる為、『光』を人に与え」真紅の唇が、彼女の冷たい首筋に生命の流れを探る。

「我らには、永久の命と引き換えに『闇』を与えた。」

「それを判っていないから」

声は……天空から降り注いだ。「何故、『光』との境界線を越えようとする?」

「……」

青年はゆつくりと彼女の首筋から唇を離し、夜空を見上げた。

微かに煌く都会の星々を背に……

彼は、頭上の道路に沿うガードレールの上で静かに立っていた。

- 1

黒いコートがたなびくその姿に、青年が目を細める。

魅入られたかの様に・・・。

「永久の闇を彷徨う俺たちの虚しさなど」

青年は答えた。「あなたには解らない。『光』をも魅了する、

帝王」・・・

あなたには。」

「・・・」

頭上の青年は、翡翠色の瞳に陰を宿して、形の良い眉を顰めた。

「あなたが我らの長を倒してから、一族は『混乱』に陥った。」

青年は女性を地上に横たえて、きつい眼差しを彼へと向けた。

「長の血の恩恵を受けられぬ吸血鬼一族がどれだけ惨めなものか・

・あなたにも解るはずだ！」

非難を込めた指先は、舞い降りた美貌の青年の眼前に突き立てられた。

「『生命』の乾きを癒す為に夜毎流離い、『人』を狩る。・・・

高貴と称された一族の成れの果てが、これだ！」

彼は悔しげに、鋭い牙で下唇を噛締めた。「お前が我らの長、九桜様を倒さなければ・・・『光』と『闇』とを統べる真の『帝王』の座を彼に許していれば！」

青年の右手が閃光の速さで『帝王』と称された彼の胸元へと伸びる・・・

「永久の闇を、我らは彷徨う事などなかった。」

ザッ・・・

しかし、鋭く伸びた彼の爪は美貌の青年の胸元に達する事はなかった。

翡翠色の瞳の青年は、夜空に向けて優雅な弧を描いて舞い上がり  
- - -  
吸血鬼の若者は、その視線を肩越しに背後へと移した。

「『高貴』と自賛自称するなら」

背後には、新たな若者の姿 - - 昏間、人なつっこい笑顔を見せる彼が、今は不敵な笑みを浮かべて手中に収めた吸血鬼を見下ろしている。

「もそつとそれに相応しい行いをしろよな。人間あさりなんざ -

- - -」

と、青年の背中に突き立てた自分の右手をざつ - - - と勢い良く引き抜く。

「狼だつてしやしないぜ。」

「こい - - - つ」

吸血鬼はその腕にすがる様にして、体のバランスを崩した。

左胸を強く握り締め、

ウルフガイ

「狼男風情が - - - !」

「その先は」

彼 - - 秀は、冷たく吸血鬼の両腕を払いのけて言った。「果て世”の後で言うんだな。」

さつ - - - と、ビルの谷間を吹き抜けた風が、アスファルトに倒れ込む青年の姿を包み込み - - - そのまま夜空へと駆け抜けて行った。

無形の屍と化した、彼の灰を<sup>からだ</sup>抱いて - - - 。

秀は見送る様にその眼差しを夜空へと向け、それからガードレールに身をもたせる黒いコートの青年に視線を移した。

「和人。」

その名を苦笑と共に呟く。「まったく……このところ『夜遊び』が過ぎると思つたら、吸血鬼狩りなんぞしてたのか？」

「狩りたくはないけどね、」

翡翠色の瞳の青年、和人は軽く肩をすくめて秀の前に舞い降りる。

「人に危害を加える一族を見過ごすわけにはいかないさ。」

「『帝王』としては？」

秀はにやつと笑つて言った。「このところ、やけに新宿中が血生臭いと思つたら」

と、横たわる女性の傍らに膝をつく青年の後姿を見つめ、

「やっぱり九桜の側の奴らが犯人か。」

「仕方ないさ。」

和人はふつと、呟く様に答えた。

彼女の首筋に細い指先をあて、その命の所在を確認してから、「一族の長を欠いた者たちが、どういう『末路』を辿るか……」

和人は先刻の青年の言葉を思い起こしながら、秀を振り返り見た。

「『高貴』故の末路さ。」

「引きずられるなよ、和人……彼らの想いに。」

秀は和人の、その澄んだ瞳をじつと見つめながら、「お前には奴らと違って『昼』の生活がある。陽光の下での……『帝王』である前に。義務だ責任だと夜を駆け抜けて、気が付いたら『闇』の世界に縛られて抜け出せなくなった、なーんて事になるなよ。」

「秀……。」

「馬鹿……んな顔するな。」

秀は立ち上がった和人の胸元を軽くこづいて片目をつむってみせ、「そんな事、俺がさせない……もしそうになったら『Office Too One』が食いつばくれるわい。」

「あはは・・・」

和人は初めて笑みを浮かべた。「人使い荒いな、こいつ！」

「お互い様、お互い様。」

秀も微笑み、彼の肩を叩いた。「さつて、暫くは秀さんもオフだから、この街の『夜』の治安に一役かきましょうか？」

中央通りを流れる深夜タクシーの無数の光が、二人の姿を照らしていった。

ge - 8

MOON - 1 『もう一つのおとぎ話』 Sta

「ねえ、知美さ・・・」

下高井戸にある某私立高校・・・昼休みの賑わいを余所に、教室の一角で無心に本を読む彼女の姿を肩越しに眺めながら、「最近、何か様子が変じゃない？急に無口になっちゃったし・・・。」

京子は廊下側の晶子の席に腰掛けて呟いた。

「そうね・・・」

晶子は五時間目を使う数学の教科書を鞆から取り出して答えた。

「つきあい悪くなったし・・・。」

「あの日から」

と、礼奈は先週のALTA前での台詞を思い出しながら、晶子の隣で答えた。

「特におかしいわよね・・・。あたし、あの後、知美から『Off  
face Too One』」

の尾崎さんの住所、教えて欲しいって言われたんだよ。」

「え、マジ・・・？」

京子は思わず身を乗り出して、小声で叫んだ。「まさか、本気で『彼』にのめり込んだじゃった・・・知美ったら。」

「それで」

と、晶子は両手を腰にあて、「この間の彼氏と別れちゃったとか？」

「やだ、冗談でしょ？」

京子は笑いながら、「今時芸能人と彼氏を取り替えるヤツなんていないって！」

「でも近頃、彼と知美が会ってないって本当だよ。」

晶子は言った。「二人のデート場所っていったら、新宿のカクテルハウス

『ROZA』って決まってたじゃない……彼が大学の授業が終わった後、バイトしてたっていう……」

と、そこで彼女は声を潜め、親友の顔を視線で集めた。「その『ROZA』にも、近頃、彼、来てないんだって。」

「本当？」

京子が目を丸くして、推論を述べる。「何か事情があつて大学、やめたのかな。」

「遊び人だったとか？」

礼奈が小声で呟くと、晶子は肩をすくめて、

「よくある話だけだよ……可哀想だよな、知美。」

視線を、窓際の中央の席でひっそりと座る、知美の横顔に移した。

「春樹、春樹って……あんなに慕ってたのに。」

MOON - 1 『もう一つのおとぎ話』 Stage - 9

鮮やかなネオンライトと人々の喧騒が、再び訪れた週末の、新宿このまちの全てを包み込んでいた。

不夜城……『闇』をも制したかの様に、『昼』の住人たちはピルの谷間を埋め尽くしている。

東口の私服姿の若者に轟くアスファルトの上に、制服姿の少女は足を踏み入れた。

知美、と彼女の名を呼ぶ友人たちは、今宵はいない……。中央の花壇の脇に位置を構え、少女は前方のスクリーンを隣のもの達と同じ様に見上げた。

『光』と『闇』を制した翡翠色の瞳を持つ青年が、ゆっくりと振り返る……

舞い踊る、緑の木の葉。

「和人……」

知美は呟いた。

信号が……青に変わる。

「お前も、彼に魅入られたくちかえ？」

夜風に揺れる木立の葉音に紛れて、知美の耳に一人の女性の声が届いた。

「……誰？」

知美は振り返り、周囲を見回した。

そこには、いつもと変わらぬ『街』に溶け込んだ人々の姿。

勤めを終えたスーツ姿の男性が、同僚たちと群れをなして通り過ぎ、ロックミュージシャン風の男性は黒いバツクを片手に茶色い外壁に背をつき、もたれかかっている。

そして……刹那の間に入れ替わる、都会の風景。

知美は再び、ALTAに視線を戻した。

スクリーンは既に美貌の青年の姿を映し出していない。

知美は、視線をその真下に移した。

「彼に……『帝王』に魅入られてはならぬよ、知美。」

スタジオALTAの入り口で、青いドレスの女性が、長い黒髪を靡かせて微笑んでいた。

『異質』な魔性の美を備える彼女の『存在』に気付く風もなく、人々は彼女の前を通り過ぎていく……

知美は目を細めて、その姿をじっと見つめた。

届くはずのない声が、車の激しく行き交う道路を越えて彼女の耳へと届く。

「正体を知られたからには、『彼』はお前の命も奪いに来るだろう。」

「!・・・」

知美は息を呑んだ。その反応を楽しむかの様に、青いドレスの女は悠然と微笑み、

「お前も見たであろう？ 翡翠色に輝くあの闇色の瞳を・・・」

「あの人は何故」

知美は掠れる声で尋ねた。「春樹を殺したの？ 同じ吸血鬼ヴァンパイアなんですよ？ - - 私」

と、握り締めた右手を胸元へあて、「彼と『永遠』に一緒にいられるなら・・・」

吸血鬼になってもいいと思ってた。」

「『光』と『闇』の境界線など・・・誰が決めた事であろうの。」  
通り過ぎる女子大生の一団の向こうで、彼女の唇がそう刻む。「

互いに求めるのであれば、そのようなもの必要ないだろう。」

「ええ、そうよ。」

「なのに、彼はお前からお前の全てを奪った。」

「そう・・・!」

「ならば - - 復讐を遂げるがいい、知美。今は亡きそなたの愛しき者も」

女性は紅の唇に白い牙を宿して微笑んだ。

すつ・・・と、彼女に向けて優雅な仕草で右手を上げ、「それを望んでいるはず。」

声は夜風に流れて、知美の耳に確かに届いていた。

そして - - 握り締めた右手を胸元から離れた時には、既に彼女の姿はそこから消えていた。

何一つ変化もない様に、ネオンの下、夜の街は流れていく・・・。  
「.....」

知美は無言で右手を見つめていた……彼女から託された一本の「香木」を。

MOON - 1 『もう一つのおとぎ話』 Stage - 10

新宿駅南口、LUMINEが灯すネオンの明かりを遙か遠方に望み、和人と秀は十六夜の青白い月下を、センタービル方面に向けて飛翔していた。

激しく叩く冷たい夜風をその黒髪に受けたまま、秀は傍らの和人に向かつて、

「血の臭いがするぜ、十六夜も終わるっていうのに。」

赤い下で唇を軽くなぞり、ニヤリと笑った。

「秀、お前あまり無理するなよ。」

そんな彼を戒めるかの様に、「満月を過ぎたら、お前には不利だ。」

和人はそう言うと、秀の眼前で急旋回し、中央公園へ向かった。都庁の第一本庁舎の屋上に軽く右足をつき、体制を整える。

「冗談でしょ？ダンナ。」

秀も遅れず、その見えない中空の軌跡を辿ると、公園通りのアスファルトへ片膝をついて着地した。

上空に浮かぶ和人を見上げて微笑み、

「空中戦じゃ、確かにお前には負けるけど……」

と、言うが早いか……彼は疾風の速さで闇の中を駆け出した。間を入れず、黒い影が数個、彼の周囲を取り囲む。

「『光』に侵された奴らめ！」

左側の影は怒りを込めて吐き出した台詞を、右手の長く伸びた爪と共に彼の胸元めがけて放った。

ビュッ・・・

風を切り裂いて迫る刃を、秀は軽く身を捻ってかわしてみせる。その振り向きざま、彼は背後の影を左胸に抱き込むと、  
「十六夜の狼男も、舐めたら痛い目に合うぜ！」

ゲキッ

何気なく入れた彼の力は、難なくその影の首筋をへし折っていた。  
「秀・・・」

和人は白いシャツの裾を靡かせて地上に舞い降りると、彼の頭上に迫る影に向けて左手を伸ばした。

一瞬・・・その翡翠色の瞳が煌きを帯びると、青白い閃光が彼の左手から迸り、  
眼前の影の左胸を直撃した。

「ぐっ！」

見上げた秀の頭上で、影は苦痛の声を漏らしながら、「お前なぞ・・・！我らの  
帝王と認めるものかつ！」

白い牙を剥き出しにして、中空に舞い上がる和人の胸元目がけて飛び込んだ。

「！！・・・」

「和人！」

月明かりを背に、もつれ合う二つの影を秀の瞳が映し出した時、再び無数の刃が秀の体目がけて暗闇から浮かび上がった。

「ちっ！しっこいぞ、お前ら！」

数人、和人の元へ向かわせてしまった事を悔やみながら秀は舌打ちをすると、

手近な吸血鬼の体を掴み、冷たいアスファルトに向けて叩き付けた。  
「大人しくしてりゃ、いい気になりやがって！」

中空で暴転を切り、刃の輪から抜け出す秀の眼光に、紅の光が宿った時。

「貴様らは、狼男<sup>ウルフガイ</sup>一族の敵だつて事……思い知らせてやるっ！」  
鋭く、夜の静寂を切り裂く咆哮……

秀の体は軽く舞い上がり、再び地上を目指した時には、彼の口元には煌く二本の野生の犬歯が宿っていた。

一陣の風と化した彼の体は、遅い来る吸血鬼たちの五体を貫き、瞬く間に風の中へ四散させていた。

アスファルトへ着地し、無数の屍が月明かりを遮るのを眺めながら、天空へと紅の瞳を移す。

灰色の雲が……十六夜月<sup>いほよづき</sup>の前を通るところだった。  
幾つもの断末魔が、一瞬暗闇を駆け抜けていく……

「……」

秀は、僅かに目を細めた。

風に雲が流されて、再び十六夜月が地上に向けてその姿を現すと、彼の瞳に一人の青年の姿が映った。

MOON - 1 『もう一つのおとぎ話』 Stage - 11

天空の月を、その煌きを従えて……彼は十六夜の天空に君臨していた。

長めの前髪の下から覗く、翡翠色の光を帯びた切れ長の瞳……  
『光』と『闇』の  
見る者全ての心を魅了する、その美貌。

僅かに開けた口元から覗く二本の鋭い牙が、月光に怪しく煌いていた……

和人は口元の血を、左手で軽く拭った。

「秀。」

地上の、自分を見上げる彼の姿を認め、再び和人は地上に舞い降りた。

「大丈夫か？」

周囲の闇の『気配』を軽く見やり、彼は尋ねた。

「ああ……」

秀は、ふと現実に戻った様な面持ちで目を擦ると、和人に向けていつもの不敵な笑みを浮かべて見せた。

「天下無敵の秀さんよ。心配御無用。」

「……だったな。」

和人も軽く肩を竦めて、答えた。

それから、和人は中央通りを西口に向けて歩きながら、

「気付いてたか、秀。」

背後の友人へ、静かに問いかけた。

「え、何が。」

秀は小走りに、彼と肩を並べる位置まで近づくと、その端正な横顔を見つめて、

「一人……俺たちの事を、観戦してた奴がいたって事？」

にやつと笑った。

「さすが、ダンナ。」

和人は彼の口調を真似て答え、軽く微笑した。

大京町のマンションへ向かう新宿警察署方面へと歩みを変え、

「俺たちがワシントン・ホテル近辺にいた頃から、ずっとつけて来てたよ。」

「げっ！そんな前からだった？」

秀は心底嫌そうな顔で答えた。「宵口からずっとかよ……気付かなかつた。」

「『同族』だからね。」

和人は苦笑して答え、星の瞬きが薄れ始めた上空を見上げた。

白い薄霧がビルの谷間を漂い……あと二時間もしたらこの街は、再び動き始めるだろう。

「血が……ここ二週間程、この街を取り囲む血の臭いが妙に濃くて気になってた。誰かの『狂気』の血に反応して、他の奴らも『人狩り』に目覚めたとしか思えない……」

和人はうつすらと目を細め、探る様に視線を足下へと落とした。

「『誰か』がこの街を……『闇』を混乱に陥れようとしている。」

「『光』と『闇』、入り乱れての？冗談じゃない。ただでさえ、長を欠いた

九桜の一族のお陰で、『闇』は混乱してるっつーのに。」

無茶苦茶な奴がいるもんだ、と他人事の様な口調で呟く、秀。

「その『血』を」

と、和人は眼差しを秀へと移し、「元凶を狩らない限り、彼らは『光』との境界線を越えようとする。」

「連続殺人事件が続くつて事か……この街で。」

秀は、薄らぎ始めた街の上空を、溜め息混じりに見上げた。

「血が血を呼ぶつて訳……文字通り。」

和人は、苦笑して風に揺れる前髪をかき上げ、「どうやら血に制される事が宿命らしいな、吸血鬼おれたちは。」

刹那。

二人の間を、十六夜の残り風が静かに流れていった……。

age - 12

MOON - 1 『もう一つのおとぎ話』

St

「『光』に侵されし帝王よ。」

彼らが立ち去った都庁広場の闇に、月光下、青いドレスの裾を夜風に靡かせる女性の姿が浮かび上がる。

風に舞う仲間の屍を見送る様な眼差しを、星々が瞬く天空へと向

け、

「私はお前を我らが帝王とは認めぬ。『光』は……その人々は高貴の我らに制せられるべきもの。」

口惜しげに、自らの牙で唇に血を滲ませて、彼女は呟いた。「我らが一族の全てを以って必ずや九桜様の敵をとつてくれようぞ、和人……！」

夜陰に、無数の新たな紅い眼光が浮かんだ。

十六夜月の影が……激しく揺れる。

ガシャンっ……

リビングの窓ガラスが、月光を反射して激しく砕け散った。

「え……？」

窓際に置かれた机の上で、浅い眠りからふいに呼び起こされた祐希は思わず周囲を見回した。

「何？」

「キヤーツ！」

続いて聞こえた女性の悲鳴……朝子のものだった。

「朝子さんっ！」

祐希は身を翻して、リビングへと続く自室のドアを開いた。

カウンターに置かれたスタンドの淡い光は、リビングの広い闇の中で立ち尽くす朝子の姿と、無数の人々の姿を照らし出していた。

「来ちゃ駄目、祐希くん！」

朝子はそう叫ぶと手近な雑誌を彼らへ投げつけ、茫然と立ち尽くす祐希に、視線で背後の玄関へと促した。

「逃げて、祐希くん！吸血鬼よ！」

「吸血鬼……！」

瞬間……一つの影が飛翔し、彼女へと襲いかかった。

「朝子さんっ！」

祐希は素早く周囲を見回すと、傍らに置かれた掃除機をひっ掴み、朝子の元へと駆け寄った。「こいつっ！朝子さんを離せ！」

朝子の首に手をかける、青年の影に向かって、力の限りそれを振り上げる。

「ぐっ！」

頭上に祐希の渾身の一撃を受けた吸血鬼は、ゆらり、と背後へ倒れた。

その隙をついて、朝子が身を引くと、再び別の影が紅の眼光を煌かせて彼女たちに挑みかかった。

「人の分際で」

風のように、彼らは次々と二人を取り巻き、白い牙を剥き出しにして笑う。

「我らに刃向かおうなどと！」

「近寄るな！」

朝子を背後へ押しやり、祐希は迫り来る影に向けて力の限り掃除機を振り回していた。

「吸血鬼なんかにされてたまるかっ！」

「祐希くん、逃げなさいって！」

彼と背中合わせの体制で、朝子は観葉植物の植木鉢を投げつけながら叫んだ。

「私は大丈夫だから！」

「そんな！朝子さん一人置いて・・・」

と、肩越しに彼女へ向けて言いかけた祐希の掃除機を黒い手が掴み、この世のものとは思えぬ力で彼の体と共にその胸元へと引き寄せた。

「うわっ！」

祐希は慌てて掃除機を離すと、素早く身をかわして彼の脇へ滑り込んだ。

「うっ！」

小脇を通り抜けた少年を掴みそこねて、吸血鬼は薄闇に彼の姿を

求めた。

「祐希くん！」

朝子は振り向くと、その隙について彼の後頭部に思い切り花瓶を叩き付けた。

「ぐわっ！」

飛び散る深紅の血……吸血鬼は、悲鳴を上げて床へ倒れ込んだ。

「ちっ！」

祐希は、新たに襲いかかる影たちを必死にかわしながらカウンタ―へと飛び込んだ。

壁に背をつき、荒い息を整える。

「朝子さん、切が無いよ！」

そう叫びながらも収納庫から包丁を取り出して、再びリビングへと身を躍らす。

「だから、逃げなさいっ！」

朝子は迫り来る影を必死にかわしながら、「夜明けまで粘れば、こっちの勝ちだから！」

「そんな事言っただって！」

夜明けまで、あと二時間はある……

それまで、彼女一人をこの『闇』の中に残すなんて……。

(この血の臭いに、和人と秀さんが気付いてくれれば……！)

祐希は、彼女の背中に襲いかかる影に向かって包丁を付きたてた。

ザッ……

「ぐあっ！」

激しく吹き出す鮮血が、薄闇に迸る。

「！……」

そのあまりに生々しい手応えに……祐希の体は一瞬、凍りついた。

「あ……」

差し込む月明かりが照らし出す、握り締めた包丁に宿る紅の滴をじっと見つめたまま、祐希は立ち尽くした。

朝子の瞳に、返り血を浴びた少年の姿が映る。

「祐希くん……！」

そんな彼女の一瞬の隙をついて、背後から新たな吸血鬼が襲いかかった。

「キヤーっ！」

「……！」

朝子の悲鳴に、祐希は顔を上げた。「朝子さんっ！」

吸血鬼の腕に捕らえられた彼女の元へ駆け寄ろうとする祐希を、

朝子の鋭い声が制した。

「来ちゃ駄目、祐希くん！仮に」

と、彼女は吸血鬼の左腕に首元を預けたまま苦しげな表情を浮かべて、

「こいつらが九桜の直系だとしても……私は吸血鬼にはならないの……！」

「え……！」

祐希は思わず立ち止まった。「どういう事……？」

「そういう『血』を持つてるの……！」

朝子は背後の吸血鬼を、ニヤリと笑って見つめ、「残念ながら……」

「……帝王でさえ、私を一族に加える事は出来ないわ！」

「何だと……！」

吸血鬼は目を細めて、彼女を見下ろした。

「帝王の命の糧か……！」

動きを止めた吸血鬼たちと薄闇の狭間を縫って……一人の女性の声が響いた。

「!・・・祐希・・・」

朝子が眉を顰める。

祐希は、静かに振り返った。

「こんばんわ・・・坊や。」

青いドレスの女性は、紅の瞳で彼の顔をじっと見つめて微笑んだ。

「どうやら、あの女は八つ裂きにするしか役に立たないみたい。」

二本の牙が、微笑む彼女の口元で怪しい銀色の煌きを放った。

「- - - - -」

言葉を失い、ゆっくりと身を引く祐希の肩に彼女の右手がかかる。

彼に、それ以上の後退を許さない・・・彼女の青白い手。

「離せ・・・」

祐希は掠れる声で叫んだ。「離せっー!」

「お前には、九桜様の一族になってもらうよ。」

振り解こうとする彼の腕をねじ上げて、彼女は高らかに笑った。

「和人を苦しめるためにね。」

「やめろーっ!」

覗いた白い牙が、祐希の首筋へと近づく。

闇を彩る吸血鬼たちの紅い眼光と、低い嘲笑・・・。

「祐希くん・・・」

朝子は目を見開いて、『彼ら』の名を呼んだ。

「和人っ! 秀- - -!」

ザッ・・・

風が。

十六夜の月が、激しく揺れた。

一陣、激しい突風が不夜城の夜空からリビングへと舞い込む・・・

「何・・・!」

青いドレスの女性は、祐希の首筋から唇を離すと、その『風』を

見回した。

その瞳に……闇を切り裂く咆哮の下、悲鳴も上げずに四散する吸血鬼たちの、無残な屍が映し出された。

新たな影が、突如支えを失ってバランスを崩した朝子の体を抱き上げて、

ニヤツ……と不敵な笑みを浮かべる。

「今度は、俺たちがいる時に遊びに来てくれよな、」

戯けた……しかし、闇さえ凍て付く程の冷たい口調で秀は言った。

「ちゃんと、玄関から。」

「秀！」

振り仰ぐ朝子の顔に、思わず笑みがこぼれる。

「ちっ！」

女性は舌打ちをして、祐希の体を床へ放り投げると、素早くベランダへと身を翻した。

「痛！……」

激しく叩きつけられた祐希の頭上を、間を入れず、青白い閃光が走る……。

「甘いよ、帝王！」

女性は、迫り来る閃光を避けて中空へと身を躍らした。「そう簡単に倒されやしないよ！」

「お前か……九桜の一族の『血』を、狂気へと駆り立てたのは。」

床に蹲る祐希を庇うようにして立ち、和人は無表情で彼女を見つめた。

「『闇』に身を委ねれば、彼らも命を落とさずに済んだものを……

・！

静かに、彼は目を細めた。

冷たい風に流される彼らの、無形の屍を眺める様に……。

「永久の『闇』の果てに何が待っているのか……」

彼女は舞い上がる白い灰を見つめて、ふっ……と微笑し、ドレスの裾を翻した。

「お前は、我らからその『闇』さえ奪っただろっに！九桜様を……！」

「!……」

「そなたへの復讐」

声は、天空の彼方から凜と響いた。「私でなくとも、必ず一族の誰かが遂げてくれようぞ。」

静寂が――リビングの闇に戻った。

ge - 14

MOON - 1 『もう一つのおとぎ話』 Sta

「……大丈夫か、祐希。」

和人は床に方膝をついて、祐希の体を抱き起こした。

「大丈夫だよ、和人。」

祐希は、彼の不安げな翡翠色の瞳を見つめてにつこりと微笑んだ。

「全然、へっちゃら。」

「良かった……」

和人は微笑し……祐希の頬についた血を右手で静かに拭った。

「ごめんね、祐希。」

「和人のせいじゃないよ。」

軽く肩をすくめて答える、祐希。

「それにしても、随分派手にやってくれたもんだ。」

と、朝子を伴った秀は彼らの元へ歩み寄りながら、周囲の『惨状』を呆れた様に見回した。

「あーあ、窓ガラス、派手に割ってくれちゃって……。これが、『高貴』な奴らのする事かよ。」

遙か遠方に望むNSビルのネオンライトを一瞥し、秀は立ち上がる裕希に視線を移した。

「お姫様を守ってくれて、ありがとう。騎士くん。」  
親指を立てて、にっこりと微笑む秀。

「全然へっちゃらさ、こんなの。」

祐希も親指を立てて、彼の笑みに答えてみせる。

『男勝りの姫君だけ』と、祐希に耳打ちをする秀のわき腹を右肘でこづくと、

朝子は和人に尋ねた。

「今の女性が、九桜の一族を率いていたの？あの連続殺人事件の

・・・

「どうやら、そうらしいな。」

和人は答え、「俺と秀を都庁の『仲間』の元へ導いたのも、これが目的だったらしい。」

「女子供に手を出すんなら、卑怯にも程がある。」

「ねえ、和人・・・また、あいつらここを襲ってくる？」

祐希は和人の顔を見上げて、不安気に尋ねた。「和人を殺しに来るの？」

「祐希・・・」

和人は彼に向かって微笑し、「当分・・・俺か秀のどちらかが、夜は必ずここに残る様にするよ。」

心配いらない・・・と、彼の暖かい手が祐希の髪を優しく撫でた。

「お前も、何かあったらすぐに逃げるんだぞ、朝子。」

秀は傍らの彼女に、少しきつい口調で言った。「吸血鬼にならな

いからって無駄な抵抗して・・・もし、お前の身に何かあったら、

俺と和人は闇中の吸血鬼を狩りに

行くからな。」

彼の『本気』の言葉に、朝子は素直に謝った。

彼女たちが待ちわびた陽光が、MY CITYの方向から差し込

んでくる。

「とりあえず、」

朝子はため息混じりに、嵐が去った後の室内を見渡し、「歩く場所だけでも確保しませんこと？皆さん。」

「同感。」

彼女の提案に、和人と秀は苦笑して同意した。

「ごめんね、祐希くん。ほとんど徹夜になっちゃったわね。」

と、朝子は、彼女が吸血鬼に投げつけた雑誌をベランダへと運ぶ祐希に声をかけた。

「あ、大丈夫だよ。俺」

祐希は肩越しに振り向いて、「電車の中で寝るの、得意だから。」  
暖かな朝日が広がるベランダへと降り立った。

コンクリートの片隅に、秀がビニールで束ねてくれた雑誌を置いた時――

「……」

ふと、視界に眼下の電柱が入った。

――数日前、一人の少女が佇み……このベランダを見上げていた、その位置。

「祐希！」

眼下を見つめる祐希の耳に、和人の声が飛び込んだ。

「あ……はい！」

祐希が振り向くと、和人はリビング片隅に移動された黒いソファを指し示し、

「一時間でも、仮眠をとった方がいいよ。」

優しく微笑んで言った。

「うん……」

祐希は戸惑った表情で頷き、リビングへと戻った。

カウンター越しに朝子と話す、彼の横顔をじっと見詰める……。

「何だ、急に元気なくして。」

植木鉢の破片をかついだ秀が、通りすがりに彼の顔を覗き込む。

「何でもないよ、秀さん！」

祐希は慌てて頭を振り、「試験前なんていつも徹夜だから・・・手伝うよ。外に持つてくんでしょ、それ。」

「ああ。」

・・・私は知っている。『彼』が『昼』の住人ではない事を。

(まさか・・・ね。)

祐希は秀から破片の入ったビニール袋を受け取ると、玄関へと向かった。

広がる金色の陽光は・・・既にこの部屋から全ての『闇』を拭い去っていた。

MOON - 1 『もう一つのおとぎ話』 Sta

ge - 15

ヴァンパイア  
吸血鬼の襲来から、数日が過ぎた。

「えー！青山のオフィスへ行ったの？二人とも。」

土曜日の午後、半日の授業を終えた祐希は八王子にある高校から

新宿 大京町

のマンションへダッシュで帰宅すると、靴も脱がずにダイニングキツチンに立つ

朝子へ声をかけた。

得意のパンケーキの生地をオーブンの型に流し込みながら、朝子は振り向き、

「そうなのよ。秋服のクライアントとの打ち合わせが、急に今日の午後に変更になって・・・」

朝子は彼らに代わって申し訳なさそうな眼差しで祐希を見つめて答えた。

「和人と映画に行く約束をしてたんだって？」

「うん、どう。」

祐希は少し寂しげな表情で、ゆっくりと靴を脱ぎ始め、「でも、しょうがないよね、仕事だもん……。また、別の日に観に行くよ。」

「そんな寂しそうな顔しないの、祐希くん。」

と、朝子はケーキ作りの手を休めてにっこりと微笑んだ。「和人からの伝言でね、学校から帰ったら着替えて青山のオフィスに来て欲しいって。」

「え？」

祐希は目を丸くして、靴のかかとにまわした右手を止めた。「本当？行ってもいいの？朝子さん。」

「夕方前には終わるだろうから、それから観に行くって言ったわよ、和人。」

「……秀も一緒にね。」

「秀さんも！？本当！」

祐希は嬉しそうに答え、急いで靴を脱ぐとリビングへ飛び込んだ。南側に位置する自室へとリビングを横切りながら、

「ありがとっ、朝子さん！今すぐ、出かけるから！」

「夕食は秀に『FLO青山』のディナー・ビュッフェでもご馳走してもらいなさい。」

朝子は祐希の背中に向けて、明るく笑って言った。

青山、青山通り沿いにある七階建ての白いビル……。『Office too One』の事務所に祐希が到着したのは、三時まであと少しという頃だった。

すりガラスのエレベーターから覗く眼下には、若者が行き交う週末の街の風景が広がっていた。

チンッ

小さなベルの音が沈黙の廊下に響き渡り、扉は最上階で開いた。

「和人と秀さん、まだ打ち合わせの最中かな。」

左手首の時計に軽く目をやり、一番奥の部屋へと向かう……ファッションデザイン系の事務所がテナントとして多く入っているこの階は、

外界の昼間の喧騒を余所に静まりかえり、祐希は誰に会う事もなく目的の事務所へ辿り着いた。

「こんにちわ。」

今までも数回訪れた事のあるオフィスの、クリーム色の扉を静かに押し開く。

有線のBGMが静かに流れ、午後の穏やかな日差しに満たされた室内で、見知った数人のスタッフが彼の訪問を出迎えた。

「あ、祐希くん。」

受付に座る女性は彼に向かって微笑むと、

「こんにちわ……和人に会いに来たの？」

と、気軽に声をかけた。

「うん、そう。」

祐希もにつこりと笑い、「でも、まだクライアントとミーティングの最中でしょ？」

軽くフロアを見渡して尋ねる。

「悪いな、先約をさしおいて。」

と声をかけたのは、窓際でフィルムに目を通しているカメラマンの高木。

「高木さん！」

祐希はデスクの間をすり抜けて彼の元へと走り寄り、

「え、何で知ってるの？和人が言った？」

「まさか。『マネージャー』の秀に決まってるだろ、そんな事言うやつ。」

高木はフィルムを片手にくすくすと笑い、

「『午後五時以降の和人の予定は、全て篠原祐希が押さえてるぜ』なんて言ってたぜ。」

「え!!!」

祐希は顔を真っ赤にして身を引いた。「そんな事言ったの？秀さん。俺、恥ずかしくって、もうここに来れないよ!」

「大丈夫、大丈夫。」

傍らのデスクに腰掛けた大塚は、そんな祐希を見上げて、「祐希くんならいつでも顔パスよ。」

と優しく声をかけた。

長い黒髪を窓から忍び込む五月下旬のやわらかな風に揺らしながら、

「もうすぐ戻って来るだろうから・・・ミーティング、五階の会議室でやってるの。」

「そうなんだ。」

「あそこで」

と、背後の来客用のスペースを視線で指し示し、「待っていてくれるかしら？」

コーヒーもお菓子も置いてあるから。」

「ありがとう。」

彼女が示した黒い衝立の向こう・・・

私服姿の祐希がそこに姿を現すと、応接用のソファに腰掛けていた少女はゆっくりと彼の顔を見上げた。

金色の日差しが彼の肩越しに少女へと降り注ぐ・・・。

「あれ。」

祐希は少し驚いた表情の笑みを浮かべて、

「君は・・・確か、この間秀さんのマンションの前にいた。」

あの日と同じ……白いセーラー服に身を包んだ少女は、祐希の顔を見つめたまま静かに立ち上がった。

「……」

彼の『反応』には答えず、少女は冷たい光を放つ眼差しをそのまま衝立の向こうへと移した。

カチャ……

扉の開く音と、数人の声がフロアに流れ込む。

「あ。」

聞き覚えのある声に祐希は、衝立の陰から半袖にジーンズの姿を現した。

「秀さん！」

「祐希！」

秀は軽く手を上げて答えると、後ろ手にドアを閉じファッションコーデイネーターを勤める女性と共に窓際の彼女の席へ向かった。

「ちよつと待っててな。」

「うん！」

秀と別れた和人は、彼のいる応接用のスペースへと向かう。

「早かったな、祐希。」

ライト・グレーのラフなワイシャツに身を包んだ和人は、微笑し  
て言った。

祐希は頷いて、

「朝子さんが俺が帰ってすぐに、和人からの『伝言』を教えてくれたから。」

「そう……」

と、和人は答え、ふと彼の背後の少女に視線を移した。  
僅かに目を細める……

「祐希……その子。」

「え。」

祐希は思い出した様に、何気なく少女を振り返りながら、「あ、この子ね、実は……」

……私は知っている。『彼』が『昼の住人』ではない事を。

「……和人。」

あの日、彼女が告げた言葉を、彼に伝えるべきかどうか……。祐希が一瞬、戸惑った時。

風が……ふいに、彼の横をすり抜けた。

「あなたは、春樹の敵！」

「!……」

和人の翡翠色の瞳が、走り寄る少女を見つめる……

「え……」

祐希は振り返った。

その目の前で……

少女の体は和人の胸元へと飛び込んでいた。

ズ……ンッ

「!……」

「和……」

祐希の瞳に、苦痛に唇を噛み締めて、静かに目を伏せる和人の姿が映った。

瞬間……和人の体が少女を抱く様な形で揺らめく……

「秀さんっ!!」

祐希が叫ぶのと、彼らがもつれ合う形で床に倒れるのとは、ほとんど同時だった。

ガタンッ

「和人っ！」

秀はデスクを飛び越えて、彼の元へ走り寄った。

室内に動揺が走る。

さっ、と飛びすさる様に少女――知美は和人から身を離れた。

「和……！」

左胸を庇う形で――和人は固く目を閉じ、床に倒れたままだった。

金色の日差しが揺れる秀の足下に、ゆっくりと紅の筋が広がっていく……

「和人っ！和人っ――」

青ざめた秀は、和人の体を抱き上げると、狂った様に彼の名を呼び続けた。

「君は――！」

間を入れず、祐希は冷ややかな眼差しでその光景を見つめる少女へと飛び掛った。

彼の指先が触れる寸前、知美は軽くソファの背に飛び乗ると、見上げる秀と

祐希に向かって告げた。

「これは、復讐よ――だって、その人が、和人が、私の彼を殺したんだもの。」

と、右手に握り締めた、血を宿す一本の『香木』を彼らの眼前に突き出し、

「こっやってね。」

「貴様――！」

秀は鋭い牙を剥き出し、憎しみの眼差しで少女を見つめた。

「ぶっ殺してやる！」

「駄目！秀さん！」

祐希は秀の前に飛び出し、軽く視線で背後の人々の存在を彼に示

した。

「駄目だよ……！秀さん！」

「ちっ……！」

低い唸り声が、彼の口から漏れた。

知美は軽い身のこなしで、茫然と立ち尽くすスタッフの狭間をすり抜けると、

ドアの手前で一度だけ振り返った。

「彼を奪った、彼に連なる一族の者たちをみんなこの手で闇に葬ってやるわっ！」

憎しみと嘲笑とが入り混じった笑みを彼らに残して……知美の姿はドアの向こうへと消えた。

「和人！」

祐希は紅に彩られた床へ両膝をつき、秀の胸元で目を閉じたままの和人に向かって叫んだ。

MOON - 1 『もう一つのおとぎ話』 Stage -

17

月が……望月の終わりを告げる傾きの月が薄紅の光を宿していた。

「よくやったぞ、知美。」

NSビルの上空に浮かぶ細い影は、満ち足りた声で彼女にそう言った。

深夜、不夜城であるはずのこの新宿<sup>新宿</sup>は、まるで彼女にその居を明け渡したかの様に、今宵は深い眠りに就いていた。

人工のネオンライトの星々だけが、彼女たちの僅かな灯火となっている。

上空の影は、長いドレスの裾を翻して地上へと軽やかに舞い降り

た。

アスファルトに立つ知美は微動だにせず、彼女の再来を受け止めている。

「彼の事……寸前のところで急所はかわしたであろうが、その『香木』を胸に喰らったからには」

と冷たい視線を彼女の右手へと流し、「早くて三日……まずは、七夜は眠りに就くであろう。」

「……」

知美は無言で彼女の紅い両眼を見つめた。

そして、ゆつくりと周囲の暗闇を見渡した。

一つ……また一つと、怪しい光を放つ紅の眼光が浮かび上がり、彼女たちを取り巻いた。

先日、和人たちのマンションに姿を現した青いドレスの吸血鬼ヴァンパイアは艶やかに微笑むと、すつ……と、白い指先を彼女の首筋に伸ばした。

「されば……そなたの『願い』、叶えてくれようぞ。」

静かに、甘い吐息を柔らかな静脈辺りに近づけながら、

「お前を、我らが一族に……」  
セレモニ  
儀式。

紅の月明かりを受け、青いドレスの女性の口元に白銀の牙が二本、煌く。

「永久の命を……」

「『光』をも制する、『闇』の力を……」

闇の儀式を見守る、吸血鬼たちの冷ややかな声……。

赤い血の筋が数本、彼女の白い制服の胸元を辿った。

「……」

少女の首筋から、銀色の牙が離れる。

知美は、その気配に顔を上げて長い黒髪の吸血鬼かのしよを見上げた。

「これで……私もあなたたちの仲間になれたの？」

「そうとも。」

彼女は満足気に少女の顔を見つめて微笑み、

「私の血は、九桜様くさうの直系に匹敵する程濃いもの……。お前は  
我らの『餌』にならず、永久の闇を渡る事が出来る。」

「そう……」

知美の黒い瞳が、微かに煌いた。「これで、あなた達と同じ『力』  
を持つ事が出来た訳ね。」

知美は冷たい眼差しのまま、ゆっくりと右手を振り上げた。

「！……何を……」

ガッ……

鈍い音が、吸血鬼の胸元で響いた。

夜の静寂に、吸血鬼たちのざわめきが走る。

「……」

青いドレスの吸血鬼は、夜風に流される様に知美から身を離れた。  
戸惑いと恐怖を込めた眼差しを、彼女へと向けたまま、

「何故……何故、お前が私を。」

「『一族』だからよ。」

知美は、初めて口元に笑みを浮かべて告げた。「あなたも、彼に  
連なる『一族』」

だからよ、あの人を殺した。

「違う……！」

彼女は紅の華が広がる左胸を強く握り締め、「私は……あの者  
とは違う……！」

私は、九桜様くさうの一族の……」

掠れた女性の声を、風が少女の元へ運ぶ前に……声の主は、夜  
の闇に散っていた。

「ふ・・・ん。」

白い夜霧に乗る彼女の『姿』を眺めながら、

「たわいないものね、吸血鬼ヴァンパイアって。」

ゆつくりと、眼前に右手の『香木』をかざしてみる。「あの『帝王』って人も。」

それから、白い牙を月光に煌かせて周囲の闇を見渡した。

「さあっ！今度はあなた達の番よ！」

知美は制服の裾を翻して、天空へと舞い上がった。「夜が明けずとも、私がこの手であなた達を『闇』へ葬ってあげるわ！」

「おのれっ！」

吸血鬼は口々に恨みの声をもらすと、天空の彼女目がけて飛翔した。

「この子供ガキっ！」

サラリーマン風の男性が、いち早く夜風に乗って彼女の元へ辿り着くと、その胸元に向けて鋭い牙を伸ばした。

知美は、軽くその刃をかわすと、

「あんたになんか、負けはしないわっ！」

畏れる事なく逆に彼の胸元へと飛び込み、握り締めた香木を力の限り彼の胸元へと付き立てた。

ザッ・・・

声もなく・・・若者は塵と化す。

「くそっ・・・」

吸血鬼たちは、彼女の右手に握られた香木を睨み付けたまま、空中に停止した。

「どうしたのよ・・・かかってらっしやいよ、吸血鬼ども！」

青白い月光を受けて、知美は悠然と微笑んだ。「強いでしょ、あなた達……」

私たち人間より。」

誘う様に、香木を眼前に突き出す。

「こんな香木に、姿も残さず塵になつてしまふあなた達が、私たちを制した気であるなんて……笑つちゃうわ！」

知美は叫んだ。「短い命でも、誰かを愛して……死んでも、大好きな人に抱かれる事が出来る人間の方が！ずっと、あなた達なんかより素晴らしいんだから！」

「言わしておけば！」

Tシャツ姿の若者は、悔しげにそう叫ぶと仲間を率いて彼女の元へと天空を駆け抜けた。

「どうせ、陽が昇ればこいつも『灰』になるっ！」

「それまで引き留めるぞ！」

呼応して、公務員風の男性が彼の脇をすり抜けた……Tシャツ姿の若者と視線で合図を交わして、知美の前後を取り囲む。

「香木さえなければ、こつちのものだ！」

「！……」

香木目がけて前後から伸びる彼らの手に、知美は戸惑い、思わず胸元にそれを強く抱きしめた。

「春樹さん……！」

固く目を閉じ……闇に散った恋人の名を叫ぶ。

刹那……

月光を制して、一人の青年が天空から舞い降り彼女の体をその胸元へと誘った。

「！……」

瞬時の出来事に、吸血鬼は天空を振り仰いだ。

そこには……

月と星の煌きを従えた、翡翠色の瞳を持つ、美貌の青年の姿。

「そこまでだよ。」

白い霧に乗って……吸血鬼たちの耳に、穏やかな青年の声が届く。「この子は渡さないよ。」

MOON - 1 『もう一つのおとぎ話』 Stage - 19

知美は静かに青年の顔を見上げ、その名を呟いた。

「和人……」

魅入られた様に……その端正な横顔をじっと見つめたまま。

「帝王……!」

闇をも魅了するその姿に虜となったのか……それとも彼の降臨を畏れたのか……

吸血鬼たちは、彼を見つめたまま微動だに出来なかった。

「陽の訪れを待つか……それとも」

和人は静かに呟き、右手を振り上げた。

暗闇に迸る青白い煌きに、彼らの視線を集めたまま、「我が手に葬られるか。」

冷たい、『闇』の者のみが持つ微笑を、和人は口元に浮かべた。

「……退け!」

彼らは和人が放つ、帝王の魔力に押され後退を始めた。「我らでは、帝王は倒せぬ……! 九桜くさくら様の直系でない我らには……」

「よくお分かりで。」

と、四方へ散り始めた吸血鬼たちの狭間を一陣の影が駆け抜けた。影は、吸血鬼の一人に掴みかかると、思い切りその右頬に拳をめり込ませた。

「うっ……!」

吸血鬼は、眼下のアスファルト目がけて消えていった。それを見つめながら、

「朝子と祐希と」

その影……秀は満足気に笑って言った。「リビングの敵だ！」  
オレンジ色のネオンライトが、知美の横顔を縁取る。

「あの人は」

彼女は、ゆっくりと振り返りながら言った。

「早くても三日は、眠りに就いていると言ったわ……帝王。」

魅入られたかの様に、彼女の黒い瞳は、闇色の光を放つ翡翠色の瞳を捕らえたまま瞬き一つ出来なかった。

碧がかつた黒髪を夜風に揺らし、美貌の青年は静かに目を伏せた。

「君には、俺を倒せないよ。」

和人は言った。

ザッ……

都庁通りに植えられた樹木が、激しい葉音をたてる。

「どうして！」

知美は叫んだ。「あなたが『帝王』だから！？帝王なら、何をしてもいいっていうの！」

「……」

「春樹を……人の恋人の命を奪ってもいいっていうの、和人！  
香木を胸元で握り締める知美の両眼に、銀色の光が溢れた。「  
光』が何だっっていうの！『闇』が何だっっていうのっ！……その人が好きならば、そんな事関係ないでしょっ！」

「……そうだね。」

和人は深いため息をついた。

月光さえ色褪せる端正な横顔に、哀しみの表情を浮かべて、

「確かに……君の言う通りだよ。「永久」の闇を生きる吸血鬼にも、安らぎの人は必要だ。」

「それをわかっていながら！」

知美は、香木を握り締める両手に力を込めて叫んだ。

二本の、白い牙が少女の口元で煌く……

「どうしてあの人を殺したりなんかしたのよっ！」

「殺さなきゃ、お前が殺されていたよ！」

声は――都庁第二本庁舎の上から降り注いで来た。「人を『一族』に迎える事が出来るのは、一番強い一族の『血』<sup>エナジー</sup>を持つ『帝王』のみ。」

低い青年の声は、黒い疾風と共に彼女の傍らへと降り立った。

秀だった。

彼は、和人へ寄り添い、「帝王の直系や近親者ならまだしも、ここいらの吸血鬼の刃にかかるうものなら」

じつと彼女の黒い瞳を見つめたまま秀は告げた。

「人は、吸血鬼の生命の糧<sup>いのち</sup>となるだけだ。」

「嘘よ！」

知美は、秀を憎しみの瞳で見つめたまま、

「吸血鬼に血を吸われた者は、吸血鬼になるって……」

「おとぎ話だよ、それは。」

和人は、寂しげに微笑を浮かべた。「現に――君はその香木で、俺を倒せたか？」

「！……」

「『血』は『血』を呼ぶ――俺たちの一族では。」

天空の星が瞬き、冷たい夜風をビルの森へと誘った。

MOON - 1 『もう一つのおとぎ話』 Stage - 20

「かつて」

美貌の青年は目を伏せて、「この街には『闇』を統べる二人の吸血鬼一族の長がいた。ある時、『光』と『闇』を統べる真の帝王の座を得ようとした長は、それを制しようとするもう一方の長に倒され――永久の『眠り』に就いた。

それは・・・金色とビリジアンブルーを混ぜた色の瞳を持つ・・・  
九桜という名の美貌の帝王。

和人の声が、眠りに就いた夜の街に静かに流れる。

「『一族』は、その長の血エナジーによって生命を支えられている。あえて『欲さず』とも、永久の時を渡る事が出来る。」

「その一族の長を欠いた九桜の一族は」

秀は茶色い皮ジャンのポケットに両手をつ突っ込んだまま、「『混乱』に陥り、

夜毎人の生き血（生命の糧）を求めてこの街を彷徨い歩く・・・これが『現実』

だよ、お嬢ちゃん。」

ニヤツ・・・と、口の端に笑みを浮かべて尋ねた。

「その春樹って奴は、紛れも無く九桜の一族の者だった・・・仮に、その春樹って

奴が九桜の近親者だとしても、お前さんは夜毎人の生き血を求めてこの街を彷徨いたいのか？」

「・・・春樹が・・・」

知美はぼつりと答えた。「春樹が一緒なら。」

「奴の生命の糧になりたいかい？」

「・・・」

返事の代わりに、知美は無言で俯いて下唇を噛み締めた。

「どうしたい？」

和人は彼女に近づき、そつと尋ねた。「君の春樹は・・・ごめんね、もう・・・

いないんだ。」

「・・・」

” トコシエ ” ヲ ヒトリデ ワタルニハ サミシ スギルヨ・・・  
” コノマチ ” デハ

夜の街を駆け抜けて来た涼やかな風が、少女の耳元で囁く……。  
両肩に置かれた和人の手が――暖かかった。

「……帝王と呼ばれてる人なのに……」

アノヒト ヨリモ アタタカイノハ ナゼ……？

「一つだけ……聞いてもいい？帝王。」

「何？」

少女の戸惑いの眼差しを、和人は小首を傾げて受け止めた。

「あなたも、永久の闇の中をたった一人で彷徨ってるの？」

「……そう。でも」

和人はちらつと、傍らの秀を見つめ、「俺には……俺を『光』  
に繋ぎとめてくれる奴らがいるから。」

『ヤミ』ニハ ソマラナイ――ソノ ココロ ハ

「こいつや――祐希や、朝子がいる。」

「――……」

微笑が――十六夜の月光さえ色褪せる程の、儂い青年の微笑が、  
少女の答えを導いた。

「陽が昇れば、私も彼らと同じ『灰』になるのかな……。」「  
大好きな友人たちに、抱かれる事もなく……」

知美は、ぼつりと呟いた。

「帰りたいな――太陽の下へ。」

『かつて』

そして、新しい『闇』の物語は、一人の少女によって紡がれていく……

この新宿の『光』の中で……。

『この街には、『闇』の世界を統べる吸血鬼一族の、二人の帝王がいた。』

「知美つたら、心配したんだから！」

JR新宿駅の東口に立つ彼女の姿を見つけると、私服姿の少女たちが小走りに彼女へと駆け寄る。「このところ学校まで無断欠席してたし……」

「ごめんね。」

黒いミニスカートの裾を六月の風に軽やかにゆらめかせて、知美は、「ちよつと、体調崩しちゃってさ。一ヶ月遅れの五月病かな。」と、申し訳なさそうに友人たちの顔を見回しながら謝る。

「てつきり、春樹さんと何かあったのかと……あっ！」

思わず口にした台詞に彼女たちの視線を集めてしまった京子は、慌てて言葉を飲み込んだ。「……ごめん、知美。」

「何よ……京子つたら。」

知美は広場の中央に設けられた樹木の下で、肩を竦めて舌を出した。

「彼とは別れちゃった。田舎のお父さんが急に倒れたとかで……実家に帰らなきゃならなくなっただって。」

「あ、そうなんだ。」

礼奈は、目を丸くして答えた。

『『人』と『闇』を支配しようとする帝王を葬ったもう一人の帝王は、この新宿に留まり……』  
『光』と『闇』の境界線を越えようとする、眠りに就いた帝王の一族を『闇』へ葬るために』

「遠距離恋愛でもすれば良かったのに、知美。ロマンチックじゃない！」

人の波に押される様にして、ALTAへと続く横断歩道へと歩き始めた晶子は、隣の少女に尋ねた。

「えー、やだよ！」

知美は明るい笑みを浮かべて、「バイトの時給、そんなに高くないんだよ。」

それに彼も」

と、少し翳りを見せた瞳を隠すかの様にアスファルトへと視線を落とす。

「あまり、本気じゃなかったみたいだし……。」

『夜を駆ける……月下に、その見る者全ての心を魅了する姿を浮かべて。』

『で、お前はどうかだったのさ。吸血鬼に……血を吸われたんだろ？』

『ええ、そう。でもね』

……長い黒髪の女性が、十六夜の月光を窓越しに浴びて微笑む。  
……知美が、友人がかざした指先の彼方を見つめて微笑む。

「見てっ！『Office Too One』の新作プロモートよ！」

居並ぶ人々の視線も、礼奈と同様、ALTAのスクリーンを支配する美貌の青年に注がれる……「和人よ！」

白いコートとダークブルーのスーツに身を包んだ青年は、伏せた、長い睫の影が落ちる切れ長の目を静かに開き……少女を見つめた。陽光の中でも煌く……翡翠色の瞳で。

『私はその時、かの帝王の血を受け継いだから、『光』の中でも永久を生きる事が出来るのよ。』

『そう……』  
カウンターで彼女に寄り添う青年は、手元のワイングラスに視線を落とし、

『それが、本当かどうかは僕には判らないけど』

不夜城の夜を彩るピアノの、銀色の旋律に乗って、若者の言葉が彼女の元へと届く……。

『君の永久に比べれば刹那の間だけど……一緒に暮らさないか？』

僕の命に『果て世』が訪れる、その瞬間まで……。

『……』

彼女は驚いた様に微かに澄んだ瞳を見開き、そして微笑した。

『これは……遠い昔の出来事……。そしてこの街の何処かで今宵も繰り返される……<永遠>とういう名の、儚くせつないおとぎ話。』

微笑む女性の口元には……オレンジ色のライトに淡く煌く、二本の白い牙……。

「今度、青山にある『Office Too One』の事務所、特攻隊で行って見ない？

和人に会えるかもよ。」

横断歩道に溢れる人の波。この街を渦巻く全ての喧騒に埋もれそうになりながら、京子の声が知美へと届く。

「あ！行く行く！」

知美ははしゃいで答えた……明るく微笑む口元に、煌く二本の牙を僅かに覗かせて。

「でさ、知美、礼奈……」

今は……

『昼』の住人の居と化した、この街の陽光の下……少女たちの姿は、『光』と戯れながら人込みに薄れていった。

MOON - 1 『もう一つのおとぎ

話』 エピローグ

「ねえ、和人。」

新宿、歌舞伎町の映画館の入り口で、祐希は和人からチケットを受け取ると、ふいに彼の顔をじっと見つめた。

「え、何？祐希。」

六月のそよ風……映画館前の広場で、陽の光と戯れた一陣の澄んだ風が、和人の碧がかつた黒髪を僅かにそよめかせた。

戸惑いの表情を浮かべた少年の瞳を捕らえる、その闇色の瞳。

「『光』と『闇』って、誰が決めた事なのかな……」

そう祐希は呟くと、背後の広場を通り過ぎる人々の姿に視線を移した。

「人の中にも……ちよつとした恨みや憎しみから、他人の命を奪ってしまう人がいる……」

「……」

「光の中を……太陽の下を何食わぬ顔して、みんな当然のように歩いているけど」

祐希は静かに和人へ振り返り、その翡翠色の瞳に問いかけた。「本当に、『光』」

は『光』なのかな……。人の命の儚さに報いるため、『光』は人に与えられたものだ、和人は言ったけど……本当は、『闇』よりも濃い、俺たちの中の『闇』を隠すために……『光』は与えられたんじゃないのかな。」

「祐希……」

和人は彼の背中を軽く押し、開演前の混雑を見せ始めたフロントから、ロビーへと歩き始めた。

「どうして、そんな事思うの？」

前方に行く数人の観客と共に階段をゆっくりと降り、赤い絨毯の敷かれたロビーへと姿を現す。

自動販売機の横の席を占領した女子高生たちが、ロビーへ降り立つ和人の姿に気付き、思わず小さな声をあげた。

通りすがりのカップルの視線が、彼の横顔へ向けられるのも気にした風もなく、和人は白い壁に背をついた。

「どうしてって・・・」

祐希は少し困った様子で、目の前の彼の黒いジャケットの胸元に視線を落とした。

「何となく、そう思ったんだ。あの時・・・」

「あの時？」

「吸血鬼<sup>ヴァンパイア</sup>たちが、マンションへ来た時。」

祐希は静かに右手を上げ、「俺・・・あの時夢中だったけど・・・朝子さんを守るためだったとはいえ、あいつらを殺す事に何のた

めらいも感じなかった・・・

俺の突き刺した包丁に・・・彼の赤い血がかかるまで。」

「俺たちと同じ、赤い血だった。こうやって人は・・・」

祐希は苦しげに和人の顔を見上げ、「俺は、自分自身や何かを守るために、

いつでも心の中の闇を剥き出しに誰かを傷つける事が出来るんだな  
って・・・。」

普段は・・・光の明るさに、自分の中の闇なんて気付かないけど。」

「祐希。」

和人はそつと、唇を噛み締める祐希の肩に手を置いた。

「お前の言うことが真実なら、尚の事・・・人には『光』が必要  
なんじゃないのか？」

「え・・・」

祐希は和人の顔を見つめた。

静かに――せつなげな眼差しで、彼は祐希の瞳を見つめ、

「『光』があるから、そこに『闇』がある事がわかる、たとえばそれが心の奥底に潜む僅かな闇でも。」

「和人……」

「『光』が与える安らぎ、太陽の暖かさを知っているから、人は『闇』から

逃れようとする。抜け出そうともする――違うか？祐希。」

リリリリ……

開演時刻を告げるベルの音が、ロビーに鳴り響くのを合図に、人の波が劇場内

へと移動する。

「抜け出す術を知らない……『光』を知らない『闇』の者は」  
和人は、見上げる祐希の背に手を回して微笑した。

光に溶け込む、『時』さえ止める程の儂い微笑……

刹那の時を永遠に紡ぎ続ける青年は、立ち止る少年を優しく導く

――

「永遠に『闇』を彷徨うよ……時が、彼らを”果て世”へと誘うまで。」

無形の屍だけを、『光』の中に残し――それは、彼らが『光』を知らないから。

『光』の中に存在する術さえ知らないから――己の『闇』を『光』の下に晒される事を畏れ塵となる。

愛しき者たちに抱かれる屍もなく……。

「……でね、和人！」

照明の消えた場内への扉まで、あと少し――開演ベルと人々のざわめきに消されそうになりながら、祐希が小声で叫ぶ。

和人が、少し驚いた表情を浮かべる。

祐希は微笑み、しつかりと彼のジャケットの袖を握り締めた。

「和人は、塵になんかならないでね！光の中でも・・・！」

「祐希・・・。」

青年は・・・闇と光とが、時の狭間に紡ぎ出した美貌の青年は、優しく答えた。

「ならないよ。お前たちがいるから・・・。」

そして。

和人の右手が、重い扉を大きく押し開く・・・。

< F i n > B G M : G L A Y    R E V I E W



## もう一つのおとぎ話（後書き）

シリーズ物の第1段です。まだ先は長いです（―¥）。  
マイ・ペース更新型です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9413/>

---

MOON-1 『もう一つのおとぎ話』

2010年10月15日19時22分発行